

気仙沼市まち・人・仕事 提案（案）

復興ライフスタイル・デザインセンター

平成28年1月

気仙沼ライフデザインセンターと観光拠点ネットワーク構築による 生活×観光・産業支援

1、主旨と目的

気仙沼市民にとってこれからの生活再建は街づくりにかかっている。住みなれた場所を離れて高台などへの移転や集合住宅などの生活がまっている。商店街や公共施設、身近な公園や海、港など生活するうえで必要な施設の利用勝手も新たなものとなる。そしてなによりも失われた人々を思い、新たな人々との交流、助け合いの元、新たな街のコミュニティーが出来上がっていくことになる。生活や街の基盤であった自然そのものも災害で大きく変化し、港の堤防、地盤、道路などのインフラもすべて新しいものに置き換わっていく。しかしこれまで長年かけて培ってきた気仙沼の伝統が根こそぎなくなることはない。自然は大きく痛めつけられたとはいえ残っている。生活の様式やしきたり、町での暮らしぶりも残っている。それら自然と伝統に新たな要素を加えてこれからの街や生活は形作られていく。災害からの復旧や復興という技術面ばかりでなくまちや生活に新たな付加価値をつけるものであってほしい。すなわちこれまでの生活を復興することに加え、生活や産業に新たな技術や文化、消費活動、観光などの要素を付け加えることによって経済的豊かさや新たな生活の展開が可能になるのではないか。そのような新しい生活の形の実現へ向けたプロジェクトとして観光と街づくりプロジェクトを融合する「気仙沼復興ライフスタイルデザインセンター」を提案する。

2、コンセプト

1) 気仙沼観光コンベンション協会と連携

気仙沼復興語り部	×復興街づくり語り部＝復興街づくりツアー
----------	----------------------

- | | |
|------------|---------------------|
| ①気仙沼復興語り部 | 災害の状況を説明＋歴史的民族文化の総会 |
| ②復興街づくり語り部 | 復興の街を説明＋新たな生活文化の提案 |

復興都市計画、建築計画、住宅建設
内装製作、コミュにテー計画の説明
住宅メーカーなどの橋協力を得る。

2) 復興街づくりツアーの拠点

本部 デザインセンター

気仙沼風待ちエリア 歴史的建造物の活用が望ましい

地域拠点

ツアーエリアの現代版茶店の設置

唐桑 大島 八瀬 階上 本吉

3) 本部イメージ

地域の復興デザインセンター＋観光センター＋展示センター

物産販売 飲食

将来は宿泊施設を建設

地域ボランティアプラットフォーム機能

地域文化調査

デザインガイドライン作成

ツアールート作成

地域文化の展示 唐桑御殿、気仙沼尾形家の展示

被災した民具の展示

4) 地域依拠イメージ

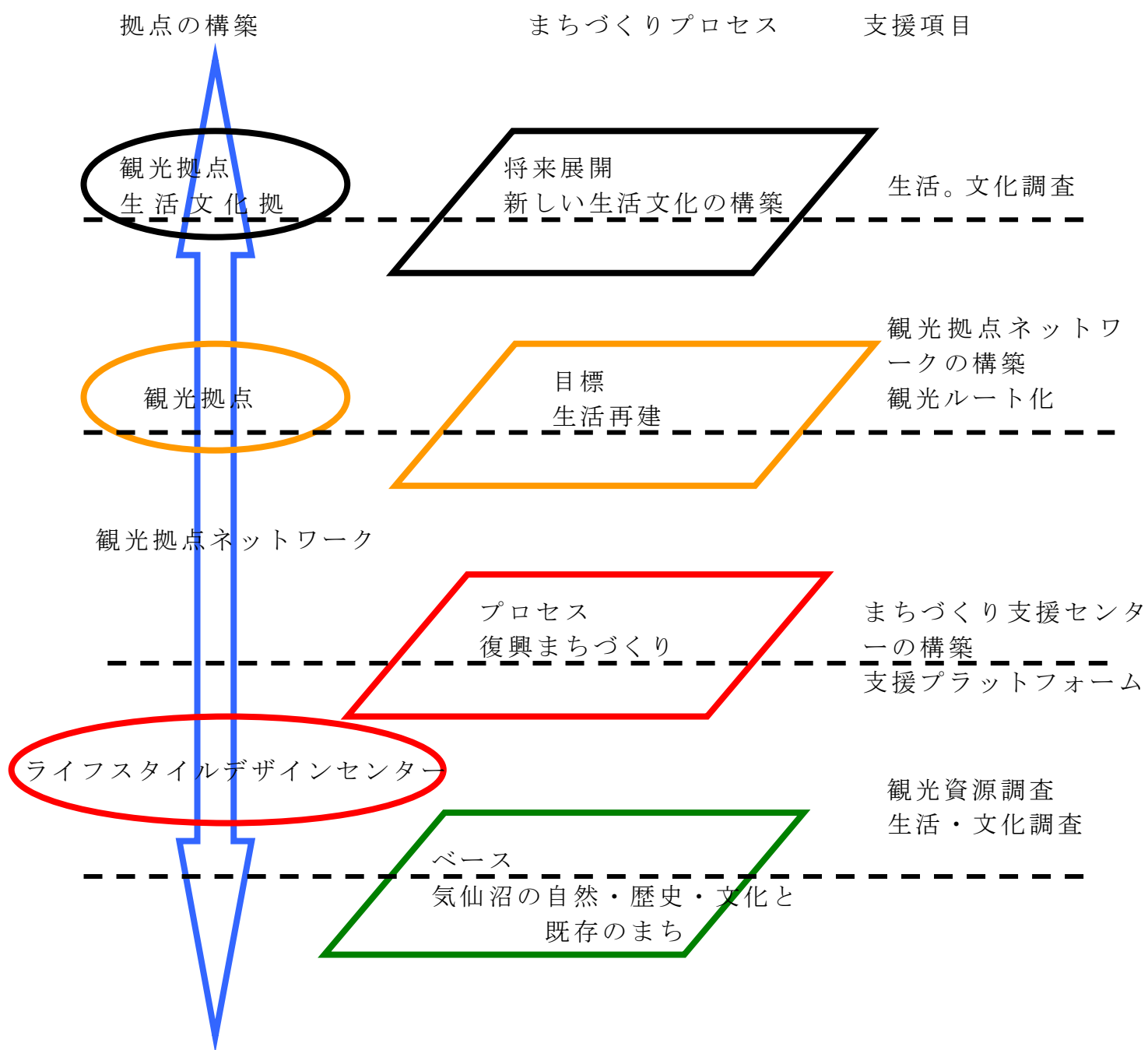
景色を展望できる場所に茶店

できれば人がいる ゴルフ場の茶店程度でも可

地域のシニアが中心になって管理運営する。

5) 段階計画

気仙沼ライフデザインセンターと観光拠点ネットワーク構築による
生活×観光・産業支援





様々な専門知識を持った語り部ガイドが、「海と生きる気仙沼」の今を伝えます。防災教育旅行や視察に是非ご活用下さい！！

気仙沼震災復興語り部



さあ、みんなで気仙沼のごどかだっぺし！

気仙沼震災復興語り部とは

2011年3月11日、午後2時46分に発生した東日本大震災により、三陸沿岸部は未曾有の被害を受けました。そんな被害を乗り越えて逞しく生き抜く人々の様子を語り部が結成しました。

講師陣として、行政経験者、避難所管理者、仮設住宅住民、ホテル社長、寿司職人、元消防長、住職・神主、自治会長など多種多様な構成メンバーとなっており、市全体が一堂となって気仙沼の今を伝えます。

1 震災に係わる様々な説明が可能です

30名を超える、様々な職種、震災を体験をした語り部が、専門の知識や経験を生かして、被災時やその後の対応、そして復興へと向けた歩みを説明します。



元消防長が語る防災学習。



甚大な被災をうけた地福寺の住職。復興へと向けた取組を語る。



市内最大の避難所責任者が当時の対応を語る。

2 講演、バスの中で、現地案内などスタイルを選べます

時には会場を貸し切って、またバスの中で・・・etc. 視察や旅行のスタイルに合わせて、様々な方法で語り部ガイドをすることが可能です。



現地での案内



講演
＊山奥での講演も可能です

3 気仙沼全地域を使ったコースを作製できます

リアス式海岸の風光明媚な唐桑半島。東北最大の有人離島である大島。塩田としての歴史が深い階上。海と山の恵み豊かな本吉。そして、日本有数の漁港である歴史ある気仙沼の内湾地区。

このすべてのフィールドを使って、バリエーション豊かなコースを作ることが可能です。

モデルコース

①内湾視察コース（1時間）

内湾地区

かつては魚市場があった気仙沼の歴史深い地区。気仙沼大島への客船の発着所がある。現在、被災した登録文化財の修復が進められている。



魚市場周辺

現在の魚市場の中心地。加工場や冷凍庫、製氷工場など水産業に係る様々な施設があったが、その大部分が被災により廃壊となり、順次かさ上げの作業が進められている。

唐桑地区

内湾の奥にあり、津波に続く火災の被害が大きかった地区。現在は、かさ上げ工事が進んでいる。その工事を見守る高台と展望台が作られている。

②内湾～階上 or 唐桑半島視察コース（2～3時間）

内湾視察コースから

唐桑地区

三陸復興国立公園の南端に位置し、複雑な海岸線が特徴的なリアス式海岸の地区。津波石など津波に係るスポットが点在している。

階上地区

かつては伊達藩御用達の塩田があった地区。現在は、4階まで浸水をした木造瓦葺高層校舎が震災遺構の模範として残る。

③震災総合学習コース（3時間）

内湾～階上 or 唐桑半島コースから

唐桑地区

ビジター・センター津波体験館唐桑半島の自然と暮らし、津波の歴史などを紹介するほか、スクリーン上映し出される映像と共に、音響や振動を体験して、東日本大震災の脅威を体感できます。＊体験館は有料となります。

階上地区

リアス・アーク美術館震災発生直後から当館の学芸員が取材してきた約3万点に及ぶ記録写真の一部と被災資料に解説を加え展示しています。

4月2日より、リアスシャークミュージアムが再開しました！！

震災に係る映像（20分）ほか、サメをはじめとした気仙沼の水産業について学ぶことができます！！



※ 要望に応じて様々なルート構築が可能です。

教育・視察旅行のご要望に合わせてますのでご相談ください

料金 ※10名様以上の団体様からの対応となります。

教育旅行対象（高校生以下）2,000円（1時間）～

一般団体対象 3,000円（＃）～

連絡先：気仙沼観光コンベンション協会

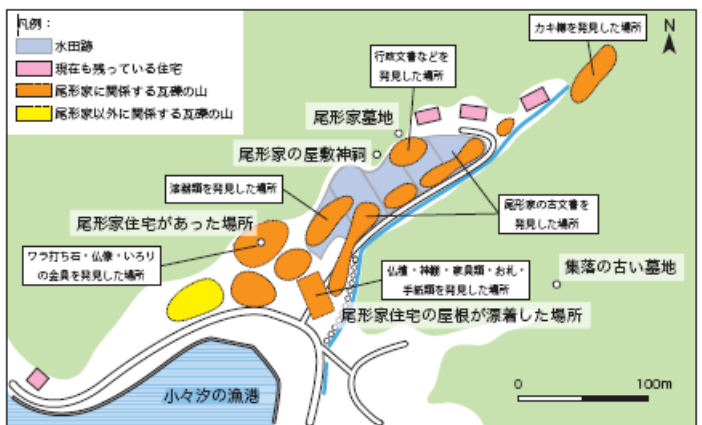
TEL 0226-22-4560 FAX 0226-22-9280



国立歴史民俗博物館 民家からの被災民具・生活用具の救援活動 宮城県気仙沼市の尾形家住宅におけるとりくみ



被災後の尾形家住宅。『宮城県気仙沼市小々沙地区』2010年12月



小々沙地区の被災生活用具・民具の散乱状況

3、実現方法

1) 生活調査

気仙沼の伝統的な生活や街の調査をベースに新たな生活空間野提案をおこなう。

2) 観光資源調査

気仙沼の自然や伝統に根ざした観光資源調査とルートの開発

復興街づくりにおける観光資源化の試み

それらを広域観光ルート、復興観光ルートと組み合わせた商品化調査

3) 気仙沼ライフデザインセンターの構築

生活文化の集積や提案と観光拠点を金合わせた拠点を構築し

気仙沼ライフデザインセンターとする。

生活再建のための住宅やインテリア、家具、織物などの文化、食文化と観光産業に係る人々が集まるプラットフォームとする。

4) 拠点を結ぶネットワークの構築

復興街づくりを支援し観光ルート化するための現代の茶店とも言うべき小さな拠点を設置しネットワーク化する。

3、チーム街づくりとしての役割

新たな生活空間の提案

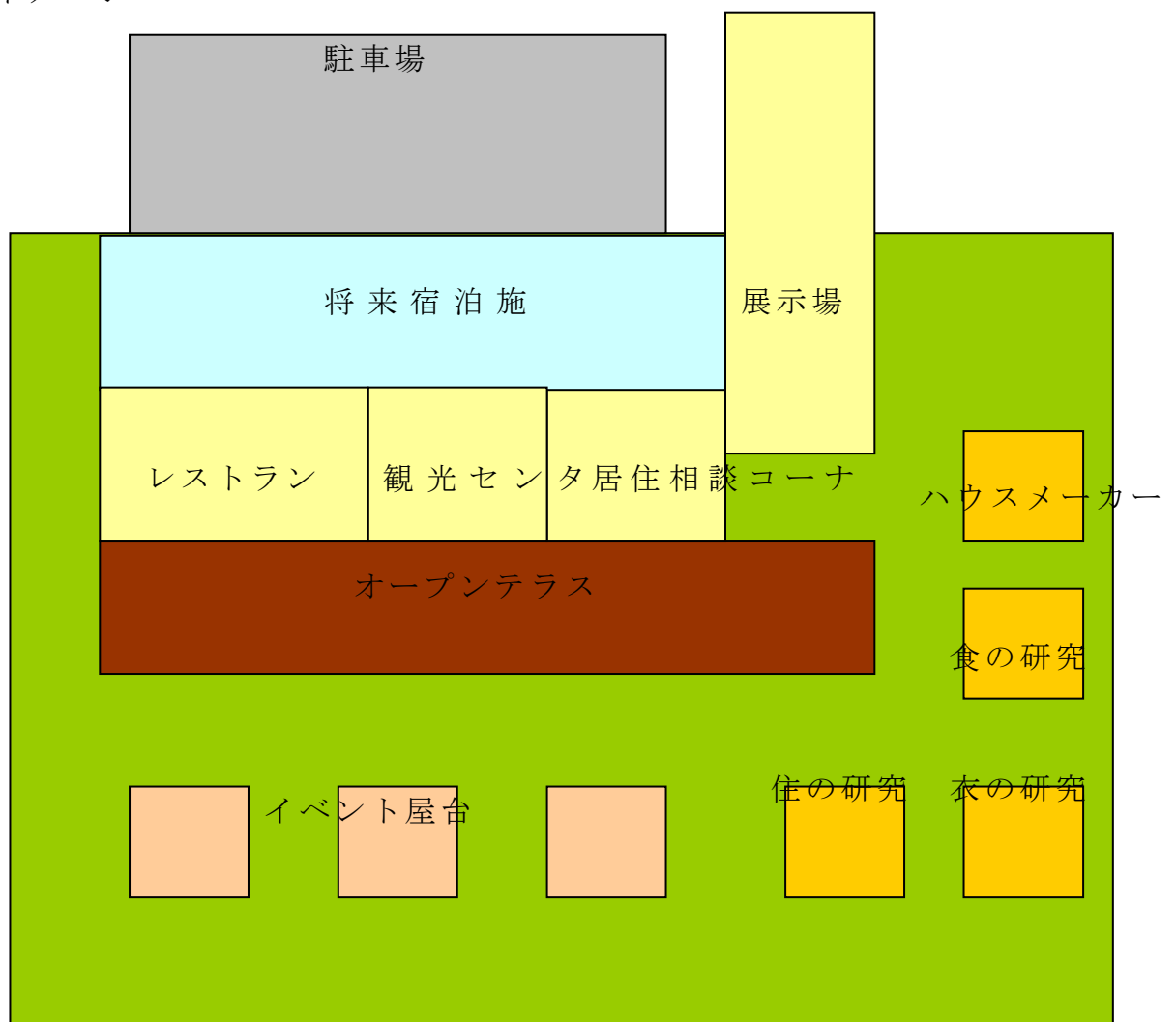
観光を兼ね備えた復興街づくりの提案の場とする。

4、気仙沼 復興ライフスタイルデザインセンターのイメージ

1) 機能イメージ

観光と生活を組み合わせて新たな生活の形を作り、見せながら楽しんでいただくための企画、交流、実践スペースとしてのデザインセンター。そこには広域観光情報、気仙沼の中心街と大島、唐桑半島などを紹介する中域情報センター、港町の情報センターがある。生活を形作るための街づくりデザインセンターも中核にあり住宅展示場も併設され住宅相談にのっている。ライフスタイルデザインセンター発の各種観光ツアーがあり年度ごとのイベント企画や芸術祭の事務局ともなっている。また観光客が自ら撮影したり描いた絵の展示会場ともなり、さらに住民に対する住宅やコミュニティーのアイディア展示場ともなっている。提案してくれた観光客の皆様にはリピーターになっていただく。食の提供も行い、将来は宿泊施設へ発展していく。

機能イメージ



2) 活動イメージ

① 情報収集

復興関連、まちづくり、観光、組織などに関する情報の収集分析

② 事業企画

まちづくりと観光を結びつけて推進力にするための事業企画

③ 事業実施

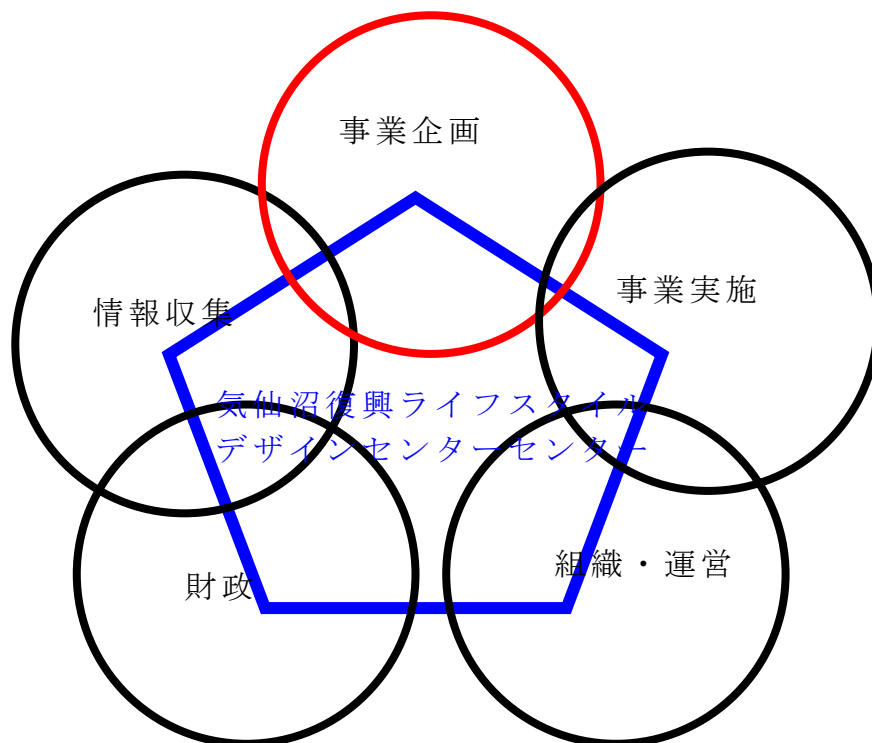
観光ルート案内、家の計画、まちのプランニングなどの活動 4、組織・

④ 運営

組織、人材集め広報活動などをおこなう。

⑤ 財政

復興ライフスタイルデザインセンターに必要な予算を行う



3) 街並と観光のマッチングプロジェクト例

住宅地縁側空間

戸建住宅地や集合住宅地にコミュニティースペースとし集会室、コンビニ、カフェテラスを設置して、住宅地の人々と外部のお客様や観光客にも茶店サービスをする。観光町歩きの一環として街を楽しみながら球形や交流が出来る縁側空間を設置する。

大島景観まちづくりガイドライン作成

大島への橋が出来ると多くの観光客が訪れ、宿泊施設や観光施設が建てられる。風光明媚な大島を守るためのガイドライン作りをおこなう。

気仙大工の技の継承

気仙大工の家々を見ながら現代の家造りにも継承できるような提案を行う。陸前高田の気仙大工民家園を中心に蓄えられた技術を体験、継承しながら現代の街並に活かしていく。

風待ちエリアの昭和レトロ建築の復元

災害から残った建物を復旧して街の活性化に役立てる。とくにプラットフォームとして活用する。

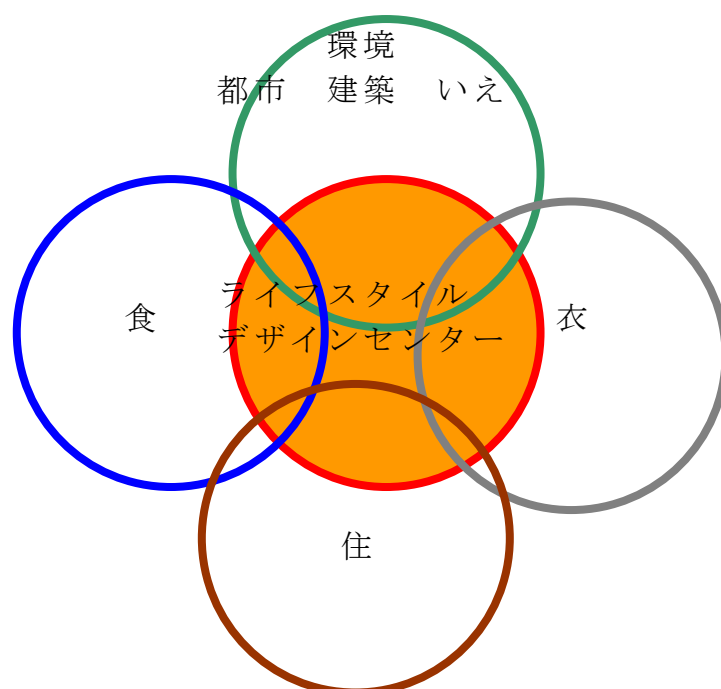
芸術祭と模型の展示

観光客が旅の思い出の写真や絵と共に町への提案を形にして残していく。秋の芸術祭に展示して将来生かされたかどうか再び街を訪れて確認するまちツアー

自転車、歩行、新交通などによるまちツアーの実施

食の提供

地域ならではの食の提供



6、おもてなしによる新たな付加価値の創造

これまでも気仙沼への観光客は三陸の風景を楽しみ、伝統や地域の生活、文化、祭り、家並みを経験してきた。それによって地域の産業にも付加価値が出て、経済的波及効果をえることができていた。これからの気仙沼の観光は、これまでの体験に加えてまちづくりのプロセスや新たな生活の形を体験してもらう機会となるのではないか。自然と地域の伝統的な生活を生かしながら災害対策や防災まちづくり、新たなコミュニティーのありかた、まちのありかたなどについて工夫を重ねながらそのプロセスに参加してもらうことによって体験型の観光として付加価値を生み出すことが可能ではないか。専門家ばかりでなく広く一般の方々から見てさまざまな提案があるのではないか。現代の観光はヘルスツーリズムやグリーンツーリズム、オンパクなどの概念に現われているように健康志向や農業、漁業を体験したり、街並散策や芸能を体験することが観光の目的ともなっている。

観光と生活

気仙沼への観光は市内を中心とするものと広域、周遊観光とが重ね合わさったものと考えられる。港や駅前を中心としたもの、大島や唐桑半島への遠出の旅などがある。港町には昭和初期の建物などがある風待ちエリアがある。広域観光としては海沿いに行く三陸の周遊と内陸の一関、平泉、花巻などを巡る周遊観光などがある。特に一関から気仙沼は黄金酒街道として酒蔵の町や絶景をみながら気仙沼へ入る街道ルートがある。

街並散策として気仙沼湾と大島、唐桑半島の大自然をながめながら港町の風待ちエリアの風情を楽しむ。丘の上には新たな住宅がこれから作られようとしており、そこへ至る道や広場が出来つつある。そのようなコミュニティーと昔の街の模型を比較しながら新たな街や道の構想を練る。出来上がった街では人々の交流が始まり新たな港への見晴らし台も用意されている。人々のおもてなし空間によってコミュニティーを体験することも出来る。仮設住宅の生活で培ったコミュニティーや暮らしの知恵を集め体験することによって新たな町へ活かしていく。

生活空間を作りながら観光の要素をとり入れる新たな風光明媚な気仙沼の街を作り観光客を誘致する。

広域連携による観光と生活体験

